

“An Outpost of Progress”における虚の構造

The Structure of the Emptiness in “An Outpost of Progress”

後 藤 隆 浩

- I. テキストの語りと幻想的空間の生成
- II. 虚的空間における意識と行動
- III. 葛藤の虚的構造における心的メカニズム

I. テキストの語りと幻想的空間の生成

Joseph Conrad の “An Outpost of Progress” (1898) の舞台背景とプロットを構造化してとらえてみるならば、この作品は、交易所運営失敗の物語である。読者の意識においては、この交易所の運営それ自体が、虚的空間における虚的精神劇として展開されるだろう。そもそも二人の西洋人カイエールとカルリエが駐在員として預かっている交易所は、交易会社の支部として、組織全体に対して有機的に機能しているのであろうか。読者はテキストの始まりにおいて、現地所員マコーラに関する次のような情報を与えられる。

He had charge of a small clay storehouse with a dried-grass roof, and pretended to keep a correct account of beads, cotton cloth, red kerchiefs, brass wire, and other trade goods it contained.¹⁾

テキストの語りの主体によって、言語、知識、技能を身に付けて西洋化しているマコーラとカイエールとカルリエとの間に生成している表層レベルの職務上の形式的関係性および深層レベルの精神上の断絶的關係性が暗示されていると言えよう。実質的に交易活動の実務を担当するマコーラの行動は、結果的にカイエールとカルリエの精神を徐々に追い詰めていき、物語内容の悲劇的結末を準備するのである。

カイエールとカルリエの悲劇的結末は、物語構造上の必然的な帰結であったと言えよう。テキストの語りの主体は、交易所に着任した直後のカイエールとカルリエの様子を語っていく途中で、物語内容の進行を一旦停止する。そして次のように実存レベルにおいて、人間存在の本質に関する考察を展開する。

They were two perfectly insignificant and incapable individuals, whose existence is only rendered possible through the high organization of civilized crowds. Few men realize that their life, the very essence of their character, their capabilities and their audacities, are only the expression of their belief in the safety of their surroundings. The courage, the composure, the confidence; the emotions and principles; every great and every insignificant thought belongs not to the individual but to the crowd: to the crowd that believes blindly in the irresistible force of its institutions and of its morals, in the power of its police and of its opinion. But the contact with pure unmitigated savagery, with primitive nature and primitive man, brings sudden and profound

¹⁾ Joseph Conrad, “An Outpost of Progress,” *Almayer's Folly and Tales of Unrest (Collected Edition of the Works of Joseph Conrad)*; London: J.M. Dent and Sons, 1947), p.86. 以下引用はすべてこの版により、本文の括弧内に頁数を示す。具体的箇所には言及する場合も同様に本文の括弧内に頁数を示す。

trouble into the heart. To the sentiment of being alone of one's kind, to the clear perception of the loneliness of one's thoughts, of one's sensations—to the negation of the habitual, which is safe, there is added the affirmation of the unusual, which is dangerous; a suggestion of things vague, uncontrollable, and repulsive, whose discomposing intrusion excites the imagination and tries the civilized nerves of the foolish and the wise alike. (p.89)

以上の語りの主体の言説は、充分に検討される必要があるだろう。この言説によって提示されている思考に基づいて、物語内容の構造が生成しているものと思われる。この言説を読むことにより読者は、この作品の主要人物であるカイエールとカルリエの二人が、とりわけ無能力な人間として設定されている理由を理解するだろう。文明化された西洋市民社会において、カイエールとカルリエの二人は、それぞれ群衆の一人として生を保障されてきたのである。安全の感覚、安全への信頼といった心的現象は、西洋市民社会における群衆の無意識のレベルに沈潜しているものと思われる。ここでの言説の思考においては、群衆というレベルを設定して、西洋市民社会の一員としての個人の心的構造を解析しているのである。文明化された西洋市民社会を離れた個人が、原始、未開の環境に投げ込まれた場合、安全の感覚が消失し、孤立、危険、異常という感覚が生成するのは必然であると言えよう。この作品は、安全から危険へと変換された感覚と物語内容としての出来事が融合して、物語の結末へとプロットが推進されるのである。

読者は、カイエールとカルリエの二人が、初代の交易所所長すなわち死者の後任であるという設定に留意する必要があるだろう。死者として不在となった初代所長の存在は、過去の回想的情報として読者に伝達される。また物語内容レベルにおいては、初代所長の遺品がカイエールとカルリエの精神状態に影響を与える。二人は初代所長の残した何冊かの小説に熱中し、さらに本国の古新聞を発見する。そのときの二人の様子を、テキストの語りの主体は次のように語る。

They also found some old copies of a home paper. That print discussed what it was pleased to call “Our Colonial Expansion” in high-flown language. It spoke much of the rights and duties of civilization, of the sacredness of the civilizing work, and extolled the merits of those who went about bringing light, and faith and commerce to the dark places of the earth. Carlier and Kayerts read, wondered, and began to think better of themselves. Carlier said one evening, waving his hand about, “In a hundred years, there will be perhaps a town here. Quays, and warehouse, and barracks, and—and—billiard-rooms. Civilization, my boy, and virtue—and all. And then, chaps will read that two good fellows, Kayerts and Carlier, were the first civilized men to live in this very spot!” Kayerts nodded, “Yes, it is a consolation to think of that.” (pp. 94-95)

カイエールとカルリエの二人が発見した本国の古新聞は、初代所長が交易所へ着任する際に、おそらく意識的に持参したものであろう。テキスト化されていないが、初代所長は、この新聞に掲載されている論説に強く反応したものと推測される。そしてカイエールとカルリエの二人も、初代所長の心的現象を同質的に反復し、この古新聞の論説に対して群衆の読者として非常に強く反応したものである。論説それ自体は具体的にテキスト化されていないが、「我が植民地の拡張」に関して誇大な言葉で論じているものであり、論の基調は容易に理解されるだろう。テキストの語りの主体は、この論説のキーワードを列挙する。「文明の権利と義務」「教化事業の神聖さ」「光明」「信仰」「通商」、これらの言葉によって、論説の基底にある西洋中心主義の思考形態の構造が明確に把握されるのである。

カイエールとカルリエの二人は、この論説を読むことによって驚きを感じる。おそらく二人は、意識と無意識の両レベルにおいて、自分達が西洋市民社会における挫折者、脱落者であることを自覚していたはずである。そのような二人に対してこの新聞の論説は、自己の存在と意味に関する明

確なビジョンを与えたのである。しかしながら、そのビジョンは、植民地拡大を推進するための誇大な言葉による虚的ビジョンであった。二人は自分自身を見直し、自己のイメージを過剰なまでに肥大化させ英雄化させていく²⁾。

新聞の論説における言説の構造が、カイエルとカルリエそれぞれの自己を、社会的、歴史的に規定し、二人の想像力を刺激したものと思われる。二人は植民地拡大に関する言説を媒介として、自分達の空想さらには幻想を拡大させていく。カルリエは、百年後この地に町が建設されることを夢想する。「埠頭」「倉庫」「兵舎」「ビリヤード・ルーム」といった具体的な建造物を例示しながら、文明化された未来像を描くのである。歴史的進歩に関する想像力によって、現在自分が位置している未開地が、未来における幻想空間へと変容する。交易所には、文明化への過程の起点としての意味が付与されるのである。

さらにカルリエは、自分達二人を特別な歴史的存在として客体化して空想を展開する。「カイエルとカルリエは、この地に居住した最初の文明人であった」という言説においては、自分達を歴史的に評価するところの他者の視点が導入されているのである。このように他者の存在を意識したカルリエの言説は、当時の西洋市民社会の歴史的段階における植民地拡大政策と連動するものであると言えよう。カイエルとカルリエ二人の閉ざされた関係性を客体化し、他者の存在を意識することにより、いわゆる共同幻想の原初的ビジョンが発動したものと思われる。そしてこの原初的ビジョンは、やがて国民国家の一員としての原初的精神形態へと変容していく可能性を内包しているのである。

この場面における新聞は、カイエルとカルリエに対してイメージ化されたメッセージを伝達している。二人は群衆的読者としてメッセージを受け取り、心的レベルにおいて動かされるのである。ここでメディアの働きにおける二重性の問題を、確認する必要があるだろう。一般的にメディアの働きは、基本的に正負両面に作用する可能性を内包している。特に植民地政策に関する言説の場合には、国家、社会の目標を設定し提示すると同時に、美的スローガンによって群衆的読者を鼓舞し動員する可能性が内在化しているのである。

物語内容のレベルに戻ってカイエルとカルリエの空想における精神形態を考えてみるならば、現代の読者はそこに虚の構造を見いだすであろう。植民地主義を背景とした新聞における表層的言説に、二人の心情はストレートに反応していくのである。植民地拡大政策を支える言説が、当時の群衆の心情構造にどのように作用していったのかを考える上で極めて示唆に富む場面である。カイエルとカルリエは、自分達がどのような時代状況に生きているのかということについて、思考する力は持ち合わせていなかったであろう。しかしながら、自分達の仕事の本質については、無意識のレベルにおいて直感していたものと思われる。西洋市民社会における近代化の過程としての植民地拡大政策のプログラムにおいては、幻想的空間の生成という問題が常に存在していたと言えよう。

Ⅱ. 虚的空間における意識と行動

“An Outpost of Progress”のテキストは、前半第Ⅰ部、後半第Ⅱ部の二部構成となっている。カイエルとカルリエの交易所への着任から五か月が経過したあたりが、物語内容の時間軸上、第Ⅰ部の終わりの部分となっている。そしてこの第Ⅰ部の終わりの時点において、銃で武装した悪質商人達が交易所に来訪する。彼らの来訪は、カイエルとカルリエの精神に緊張を与え、物語内容の基調は、不穏な雰囲気へと転換する。テキストの語り主体は、悪質商人達の来訪の様子を次のように語る。

²⁾ カイエルとカルリエの二人は、群衆的感性を保持し続けており、それゆえに古新聞の論説に強く反応し、幻想をふくらませていったものと思われる。例えばル・ボンは、「幻想は、民衆にとって必要欠くべからざるものであるために、民衆は、灯火に向う昆虫のように、幻想を提供する修辞家のほうへ本能的に向うのである」と述べている。ギュスターヴ・ル・ボン 櫻井成夫訳『群衆心理』(講談社学術文庫、1993年)、p. 140.

Then, one morning, as Kayerts and Carlier, lounging in their chairs under the verandah, talked about the approaching visit of the steamer, a knot of armed men came out of the forest and advanced towards the station. They were strangers to that part of the country. They were tall, slight, draped classically from neck to heel in blue fringed cloths, and carried percussion muskets over their bare right shoulders. Makola showed signs of excitement, and ran out of the storehouse (where he spent all his days) to meet these visitors. They came into the courtyard and looked about them with steady, scornful glances. Their leader, a powerful and determined-looking negro with bloodshot eyes, stood in front of the verandah and made a long speech. He gesticulated much, and ceased very suddenly.

There was something in his intonation, in the sounds of the long sentences he used, that startled the two whites. It was like a reminiscence of something not exactly familiar, and yet resembling the speech of civilized men. It sounded like one of those impossible languages which sometimes we hear in our dreams.

“What lingo is that?” said the amazed Carlier. “In the first moment I fancied the fellow was going to speak French. Anyway, it is a different kind of gibberish to what we ever heard.”

“Yes,” replied Kayerts. “Hey, Makola, what does he say? Where do they come from? Who are they?”

But Makola, who seemed to be standing on hot bricks, answered hurriedly, “I don’t know. They come from very far. Perhaps Mrs. Price will understand. They are perhaps bad men.” (p. 97)

来訪した商人達が銃を所持している点に、読者は留意する必要がある。一般に銃というのは、例えば槍や弓矢などとはレベルの異なる文明化された機械としての武器であり、相手に提示するだけで威嚇的效果を十分に生むであろう。商人達の交易所の中庭への侵入やさげすむような目つきは、彼らの威圧的態度を身体的によく示すものであろう。商人達の来訪は、文明社会が内包するところの暴力性の概念をテキスト内に生成させ、交易所を中心とする物語空間に亀裂を生じさせたのである。さらにカイエールとカルリエは、商人達の首領の長い演説における声、抑揚に驚く。首領の発する言葉は、文明人の言葉に似たものであったが、何語なのかは不明である。意味は伝達されないが、言語現象それ自体が他者に対して影響を与えているのである。これは、言語それ自体の行為性であると言ってよいであろう。

後半第Ⅱ部の冒頭において、読者に対して交易所の十人の人足達の存在が示される。テキストの語りの主体は、次のように語る。

There were ten station men who had been left by the Director. Those fellows, having engaged themselves to the Company for six months (without having any idea of a month in particular and only a very faint notion of time in general), had been serving the cause of progress for upwards of two years. Belonging to a tribe from a very distant part of the land of darkness and sorrow, they did not run away, naturally supposing that as wandering strangers they would be killed by the inhabitants of the country; in which they were right. They lived in straw huts on the slope of a ravine overgrown with reedy grass, just behind the station buildings. They were not happy, regretting the festive incantations, the sorceries, the human sacrifices of their own land; where they also had parents, brothers, sisters, admired chiefs, respected magicians, loved friends, and other ties supposed generally to be human. Besides, the rice rations served out by the Company did not agree with them, being a food unknown to their land, and to which they could not get used. Consequently they were unhealthy and miserable. (p. 100)

このような人足達の状況の描写は、読者の意識に軽度の驚きと刺激を与えるものであろう。健康をそこねた人足達は、無気力、脱力状態にあると言ってよく、交易所の運営に関する虚脱的雰囲気を生成している。時間意識の欠落、そして逃亡の放棄といった精神状態は、自己意識の基盤の崩壊を意

味するだろう。彼らは、故郷の共同体における人間関係、風習、信仰、制度等の諸要素から完全に遊離した状態にある。共同体が与える意味の場から離れ、存在と意味との間の関係性が成立せず、彼らは無意味性を帯びた状態となっているのである。また、彼らにとって未知の食物である米に対する食習慣上の違和感、拒絶感は、精神および身体両レベルにおいて健康を害する決定的な要因であったと言えよう³⁾。

マコーラは、悪質商人達から象牙を購入する案をカイエールに持ち掛ける。カイエールは承知して、取引の段取りのすべてをマコーラに一任する。そしてマコーラは、取引の準備の一環として、人足達に酒宴を催させる。その結果、酒宴の翌朝人足達は、全員姿を消していた。この事態に、カイエールとカルリエは驚愕する。マコーラは、人足達が沿岸地方から来た悪質商人達と一緒に去っていったことを告げる。テキストの語りの主体は、カイエールとマコーラの会話の様子を次のように語る。

“I can hardly believe it,” said Kayerts, tearfully. “We took care of them as if they had been our children.”

“They went with the coast people,” said Makola after a moment of hesitation.

“What do I care with whom they went—the ungrateful brutes!” exclaimed the other. Then with sudden suspicion, and looking hard at Makola, he added: “What do you know about it?”

Makola moved his shoulders, looking down on the ground. “What do I know? I think only. Will you come and look at the ivory I’ve got there? It is a fine lot. You never saw such.”

He moved towards the store. Kayerts followed him mechanically, thinking about the incredible desertion of the men. On the ground before the door of the fetish lay six splendid tusks. (p. 103)

カイエールの感情は、驚き、狼狽から怒りへと移行する。そして、人足達の脱走という忘恩行為の理由を追究し始めるのである。一方マコーラは、取引の成果としての六本の見事な象牙へとカイエールの関心を誘導する。そして象牙を検分した後カイエールは、取引の実態についてマコーラに尋ねる。

“What did you give for it?” asked Kayerts, after surveying the lot with satisfaction.

“No regular trade,” said Makola. “They brought the ivory and gave it to me. I told them to take what they most wanted in the station. It is a beautiful lot. No station can show such tusks. Those traders wanted carriers badly, and our men were no good here. No trade, no entry in books; all correct.”

Kayerts nearly burst with indignation. “Why!” he shouted, “I believe you have sold our men for these tusks!” Makola stood impassive and silent. “I—I—will—I,” stuttered Kayerts. “You fiend!” he yelled out.

“I did the best for you and the Company,” said Makola, imperturbably. “Why you shout so much? Look at this tusk.”

“I dismiss you! I will report you—I won’t look at the tusk. I forbid you to touch them. I order you to throw them into the river. You—you!”

“You very red, Mr. Kayerts. If you are so irritable in the sun, you will get fever and die—like the first chief!” pronounced Makola impressively. (pp. 103-104)

3) ここで描かれている人足達の状況の基層には、異文化接触の問題が存在する。テキストの語りの主体には、各共同体における土着性への視線が内在していると言えよう。Conradは、“Amy Foster”において、異文化接触および土着化の問題を、多層的に鋭く構造化している。

マコーラは、この取引が、通常の範囲を逸脱した、帳簿にも記入されない異常なものであったことを申告する。彼は、勝手に悪質商人達の持ってきた象牙六本と交易所の人足達十人とを交換したのである。人身売買という非人道的事実を知ったカイエルは激怒し、マコーラの行為を強く非難する。しかしながら、マコーラは、カイエルと会社のために最善のことをしたのだと平然と非難を繰り返す。

ここで注意すべき点は、植民地経営の実態が、西洋人（文明）対原住民（未開）といった単純な二項対立の図式に収まるものではないということである。売り払われた人足達は、遠い地方の別の部族の出身者達であった。原住民達の内部において、すでに差異化が発生しており、そこにいわゆる文明化の論理が、利害に関与する形で入り込んでいるのである。結局のところカイエルとカルリエの二人は、象牙とがらくたとの交換（p.93）という自分達の理念からかけ離れた、不誠実で虚的な交易の実態の論理を、より露骨で苛烈な形で、文明化した原住民マコーラの側から逆に突き付けられてしまったのである。このマコーラとカイエルとの対立の場面においては、マコーラが以前より心の奥底に秘めていた西洋人に対する侮蔑感情が、顕在化したものと思われる。

カイエルにとって六本の見事な象牙は、不快な忌避すべき物へと変容する。このことによって読者は、一般に物の価値は、物それ自体の物質的価値と、物に付与される文脈によって生成される精神的価値との二重構造によって認識されることを改めて確認するだろう。カイエルとカルリエの二人は、人足達が酔いつぶれた状態でさらわれていったのだと推測し、象牙に手を触れてはいけないと、マコーラの行なった無法な取引を絶対に認めようとはしなかった。（p. 105）しかしながら、二人はこの姿勢を貫くことができず、マコーラの論理に対する反発と妥協が相半ばするような中途半端な精神状態を示しながら、象牙を交易所の購入品として受容する。テキストの語りの主体は、その様子を次のように語る。

Next morning they saw Makola very busy setting up in the yard the big scales used for weighing ivory. By and by Carlier said: "What's that filthy scoundrel up to?" and lounged out into the yard. Kayerts followed. They stood watching. Makola took no notice. When the balance was swung true, he tried to lift a tusk into the scale. It was too heavy. He looked up helplessly without a word, and for a minute they stood round that balance as mute and still as three statues. Suddenly Carlier said: "Catch hold of the other end, Makola—you beast!" and together they swung the tusk up. Kayerts trembled in every limb. He muttered, "I say! O! I say!" and putting his hand in his pocket found there a dirty bit of paper and the stump of a pencil. He turned his back on the others, as if about to do something tricky, and noted stealthily the weights which Carlier shouted out to him with unnecessary loudness. When all was over Makola whispered to himself: "The sun's very strong here for the tusks." Carlier said to Kayerts in a careless tone: "I say, chief, I might just as well give him a lift with this lot into the store."

As they were going back to the house Kayerts observed with a sigh: "It had to be done." And Carlier said: "It's deplorable, but, the men being Company's men the ivory is Company's ivory. We must look after it." "I will report to the Director, of course," said Kayerts. "Of course; let him decide," approved Carlier. (p. 106)

この場面は、物語内容におけるカイエルとカルリエ二人の精神形態の変容過程を解析する際の、最重要箇所と言ってよいだろう。カルリエが最初にマコーラに同調し、重さを量るために象牙を秤に載せるのを手伝う。そしてカイエルは、カルリエが不必要なほどの大声で告げる重量をこっそりと書き記すのである。カイエルとカルリエは良心のとがめを感じながらも、最終的にマコーラが象牙を倉庫に運び込む作業を手伝う。二人は、次のような自己弁護の論理を展開する。象牙と交換された人足達は、交易会社の使用人であった。ゆえに象牙は、交易会社のものである。自分達は、この象牙をきちんと管理しなければならない。そしてこの無法な取引に関しては重役に報告し、処

置は重役にゆだねる。カイエルとカルリエの意識においては、以上のような虚的な論理の展開によって責任を他者に転嫁し、自分達の精神形態における良心の領域を防護しようと葛藤しているのである。

また、この場面におけるマコーラの態度に、読者は十分に留意する必要があるだろう。テキストの表層レベルにおいてマコーラは、カイエルとカルリエに注意を向ける様子は示しておらず、二人に直接話し掛ける言葉も発していない。二人が自発的にマコーラを手伝って、象牙の重さを量り、倉庫に運び込んだことになる。このような状況におけるカイエルとカルリエの心の動きを、マコーラはどの程度まで予測していたのであろうか。マコーラの意識と行動における戦略性のレベルは、テキストの読解における解釈の多義性を生成する問題点となるだろう。偶発的にせよ、意図的にせよ、カイエルとカルリエは、マコーラの論理に同調させられて、三人の間に共犯という関係性が生成したのである。さらに言えば、テキストの表層レベルにおいて戦略的に行動しているかにも見えるマコーラも含めて、交易所の所員三人は、無意識のうちに、より高次の植民地主義のメカニズムに組み込まれていると考えられるのである。

Ⅲ. 葛藤の虚的構造における心的メカニズム

象牙と人足達とを交換するための策略としてマコーラが開催させた酒宴は、結果的に交易所にとって極めて深刻な事態を生じさせた。ゴビラ酋長の治める村の男も数人酒宴に参加したが、その男達も人足達と一緒に連れて行かれたのであろう。そして、一番酔いの浅かった男が、銃で撃たれて命を落としたものと思われる。(p. 105) このことにより、交易所とゴビラの村との間に成立していた友好的関係が壊れる。村人達は、誰も交易所には近づかない。村からの好意に基づく食糧の供給は停止し、カイエルとカルリエの二人は、物理的、精神的両レベルにおいて、孤立状態となっていくのである。ゴビラの村人達は喪に服し、恐怖にとらわれたゴビラ老人は、災いをもたらす不可解な白人たちが、地中に消え去ることを願った。(p. 107) テキストの語りの主体は、このゴビラ老人の心情を引き継ぐ形で、カイエルとカルリエの内面の心的現象の変容を、次のように解析的に語る。

Kayerts and Carlier did not disappear, but remained above on this earth, that, somehow, they fancied had become bigger and very empty. It was not the absolute and dumb solitude of the post that impressed them so much as an inarticulate feeling that something from within them was gone, something that worked for their safety, and had kept the wilderness from interfering with their hearts. The images of home; the memory of people like them, of men that thought and felt as they used to think and feel, receded into distances made indistinct by the glare of unclouded sunshine. And out of the great silence of the surrounding wilderness, its very hopelessness and savagery seemed to approach them nearer, to draw them gently, to look upon them, to envelop them with a solicitude irresistible, familiar, and disgusting. (pp. 107-108)

ここで語られているのは、カイエルとカルリエの精神形態における心的な構造変化である。彼らの内面と外部との間に心的現象として構造化されていたところの安全装置が壊れ、西洋市民社会の一員としての精神構造を防護する心的メカニズムが作動しなくなったのである。故国の風景、人間関係の記憶が後退し、周囲の未開地の空虚な感覚が前景化する。心的視点による風景の分節化において、内的変容が生じたのだと言えよう。植民地拡大政策の理念が支えるところの存在と意味、西洋市民社会の一員としての自己規定、自己認識が揺らぎ始めたのである。

交易会社の蒸気船が再訪する日が近づいていたが、カイエルとカルリエの二人は、人足達と象牙との交換という無法な取引に関して、重役には何も報告しないことにすると結論を下した。

They had long ago reckoned their percentages on trade, including in them that last deal of “this infamous Makola.” They had also concluded not to say anything about it. Kayerts hesitated at first—was afraid of the Director.

“He has seen worse things done on the quiet,” maintained Carlier, with a hoarse laugh. “Trust him! He won’t thank you if you blab. He is no better than you or me. Who will talk if we hold our tongues? There is nobody here.”

That was the root of the trouble! There was nobody there; and being left there alone with their weakness, they became daily more like a pair of accomplices than like a couple of devoted friends. (p. 109)

ここに描かれているのは、二人だけで存在することの関係性の病理であると言えよう。共同体における第三者の視線、認識という関係性の不在によって、カイエールとカルリエの二人は規範意識を失っていく。二人の関係性は、友人から共犯者へと変容していくのである。

交易会社の蒸気船の再訪の遅延、ゴビラの村との関係性の断絶により、交易所の食糧の備蓄状態は悪化する。残っているのは、米とコーヒーのみである。カイエールとカルリエは、会話をすれば怒鳴り合う状態である。これは、二人の神経がかなりの程度にまでいら立っていることを示すものであろう。この状態は、一種の極限状況と言ってよいだろう。カイエールは、最後に残った十五個の角砂糖を病気のとくのために保存しておくことを提案し、カルリエも賛成する。(pp. 109-110) かしながら、ある日カルリエの忍耐を続けてきた精神状態はついに限界に達し、カイエールとカルリエの二人の間に決定的な争いが発生する。テキストの語りの主体は、二人の争いの発端の様子を次のように語る。

One day after a lunch of boiled rice, Carlier put down his cup untasted, and said: “Hang it all! Let’s have a decent cup of coffee for once. Bring out that sugar, Kayerts!”

“For the sick,” muttered Kayerts, without looking up.

“For the sick,” mocked Carlier. “Bosh! . . . Well! I am sick.”

“You are no more sick than I am, and I go without,” said Kayerts in a peaceful tone.

“Come! out with that sugar, you stingy old slave-dealer.”

Kayerts looked up quickly. Carlier was smiling with marked insolence. And suddenly it seemed to Kayerts that he had never seen that man before. Who was he? He knew nothing about him. What was he capable of? There was a surprising flash of violent emotion within him, as if in the presence of something undreamt-of, dangerous, and final. But he managed to pronounce with composure—

“That joke is in very bad taste. Don’t repeat it.”

“Joke!” said Carlier, hitching himself forward on his seat. “I am hungry—I am sick—I don’t joke! I hate hypocrites. You are a hypocrite. You are a slave-dealer. I am a slave-dealer. There’s nothing but slave-dealers in this cursed country. I mean to have sugar in my coffee to-day, anyhow!”

“I forbid you to speak to me in that way,” said Kayerts with a fair show of resolution.

“You!—What?” shouted Carlier, jumping up.

Kayerts stood up also. “I am your chief,” he began, trying to master the shakiness of his voice.

“What?” yelled the other. “Who’s chief? There’s no chief here. There’s nothing here: there’s nothing but you and I. Fetch the sugar—you pot-bellied ass.”

“Hold your tongue. Go out of this room,” screamed Kayerts. “I dismiss you—you scoundrel!”

Carlier swung a stool. All at once he looked dangerously in earnest. “You flabby, good-for-nothing civilian—take that!” he howled.

Kayerts dropped under the table, and the stool struck the grass inner wall of the room. (pp. 110-111)

砂糖無しのコーヒーを飲み続けることに耐えられなくなったカルリエは、カイエルに保存してある砂糖を出すように要求する⁴⁾。病気のときに備えて砂糖を使用しないようおだやかにたしなめるカイエルに対してカルリエは、「奴隷商人」と暴言を吐く。この「奴隷商人」という言葉には、自分達が人足達との交換によって得られた象牙を受容したこと、交易会社の重役へ無法な取引の事実の報告を取りやめる結論を下したことに關する精神的葛藤が、象徴的に反映されているものと思われる。カイエルは急にカルリエが誰なのかわからなくなり、未知の人物であるかのような感覚に襲われる。現実意識が薄れ、実在感覚が失われた精神状態を示している。これは、濃密な閉塞状況における心的な病理現象であると言えよう。カイエルのことを「偽善者」とであると言い、自分達は「奴隷商人」だと言うカルリエに対して、交易所の「主任」とであると言うカイエルの言葉は、全く意味を作用させない。人足達と象牙の交換という無法な取引を隠蔽することにしたときに使用した「ここには二人以外誰もいない」という論理を、カルリエはこの場面において反復しているのである。

カルリエがカイエルに対する暴力的行為を実行に移すことにより、交易所の住居を舞台とした物理的闘争が始まる。カルリエとカイエルの関係は、追う者と追われる者という関係に変化する。逃けている途中カイエルは、現在起こっている事態について考察する。テキストの語りの主体は、カイエルの思考過程を次のように語る。

What was it all about? He thought it must be a horrible illusion; he thought he was dreaming; he thought he was going mad! After a while he collected his senses. What did they quarrel about? That sugar! How absurd! He would give it to him—didn't want it himself. And he began scrambling to his feet with a sudden feeling of security. But before he had fairly stood upright, a commonsense reflection occurred to him and drove him back into despair. He thought: If I give way now to that brute of a soldier, he will begin this horror again tomorrow—and the day after—every day—raise other pretensions, trample on me, torture me, make me his slave—and I will be lost! Lost! The steamer may not come for days—may never come. He shook so that he had to sit down on the floor again. He shivered forlornly. He felt he could not, would not move any more. He was completely distracted by the sudden perception that the position was without issue—that death and life had in a moment become equally difficult and terrible. (p. 112)

正気に戻ったカイエルは、争いの原因がコーヒーに入れる砂糖を使うか使わないかという実にささいな事項であったことを思い出す。原因がばかばかしく空虚なことであると自覚したカイエルは、砂糖をカルリエに渡すことにより、この理由なき争いを終わらせようとする。しかしながら、カイエルはすぐに、この譲歩がカルリエによって無限に反復される支配、抑圧を生成することに気づくのである。交易会社の蒸気船が永久に来ないかもしれないという感覚は、カイエルの時間意識において〈終わり〉〈結末〉という概念が像を結んでいないことを意味するだろう。カイエルは、現在の状況からの脱出が不可能であることを自覚し、心が混乱する。

4) 物語内容レベルにおいて砂糖は、争いの発生原因となる素材として設定されている。読者は、この砂糖というもののそれ自体の歴史的、文化的文脈を考察することにより、テキストを、同時代の歴史と文化の状況と照応する形で開いていくことが可能となるだろう。『世界大百科事典』(平凡社、1988年)の「砂糖」の項においては、次のように説明されている。

「砂糖は、いかなる土地においても人々の嗜好に合致する典型的な世界商品＝換金作物として、熱帯植民地の最大の生産物となったのである。近世の世界経済の動向は、砂糖の生産と流通をたどることによって描くことも可能なのである。」

「近世初頭以来、砂糖生産は激増し続け、砂糖の消費量が生活水準の指標と考えられてきた。16～17世紀のヨーロッパでは、なお砂糖はごく上流の人々にしか用いられず、〈薬〉ともみなされるほどの貴重品であったが、17世紀以降、とくに紅茶の普及とともに、イギリスを中心にその消費が一般化した。」

このようなカイエールにとっての絶望的な事態は、読者にも意外な形で終息する。(pp.112-114) カイエールとカルリエが衝突した瞬間にカイエールの拳銃が暴発し、カルリエは命を落とす。しかもカルリエは、拳銃を持っていなかったのである。カイエールは、カルリエの「砂糖をもってこなれば犬のように見つけ次第お前を撃つぞ」(p. 111) という脅し文句を聞いて、カルリエが拳銃を持って彼を追いかけていると思い込んでいた。結果的にカイエールは、武器を持っていない相手を撃ってしまったのである。カイエールがカルリエを撃つ理由は、存在しない。争いの発生から結末に至るまで、生き残ったカイエールが経験した精神的葛藤においては、確実な根拠は何も無かったのである。カイエールとカルリエの二人だけで存在することの病理が、二人の関係性における精神形態に虚的構造を形成した。そしてこの虚的構造を土台として、二人の間に精神的葛藤が生じ、心的現象のメカニズムに基づいて砂糖をめぐる闘争という激しい行動が引き起こされたのである。マコーラのカルリエは「熱病で死んだ」(p. 114) という言葉は、この物語内容のテキストに生成する虚的構造の雰囲気、象徴的に強化するものと言ってよいだろう⁵⁾。

以上、“An Outpost of Progress” のテキストを虚の構造という観点から、解析的に読解してきた。主要な登場人物達の心的現象のメカニズムを考察することにより、植民地における精神形態の変容過程が解明されてきただろう。物語内容の結末における西洋人カイエールの悲劇的最期は、読者にとっても極めて象徴的な行為である。このカイエールの最期という現象は、近代西洋市民社会における歴史と文化の文脈に接続するものと思われる⁶⁾。批評的読者には、文化構造の観点から解析的にテキストを読解し、文化論的文脈へと開いていく作業が求められているのである。

5) 物語内容レベルにおいて、出来事すべての客観的目撃者は不在である。カイエールとカルリエの二人と一番近い位置にいたのが、マコーラである。マコーラは、交易所での出来事を回想的に語り直し、再現させることが可能な立場にある。マコーラの「熱病で死んだ」という言葉は、読者に対して語りによる物語内容の変形の可能性という問題を提示している。

6) カルリエの死という事実を知った後、カイエールの精神過程は、悲劇的自裁へと進んでいく。テキストの読解においては、西洋市民社会の精神文化的背景を考慮する必要があるだろう。Conrad 作品では、例えば“Heart of Darkness” や *Lord Jim* などにおいて、主要人物の死が設定されている。各作品における死の意味を、構造的に比較検討することが重要であろう。